

芸術プログラムにおける造形活動形式の提案 —「屋台」が育むもの—

守山紗弥加*・松本 金矢**・根津知佳子***

A Proposal of a Method for Education of Art and Design in the Art Program — Meaning of the Art Stall —

Sayaka MORIYAMA, Kin'ya MATSUMOTO and Chikako NEZU

要 旨

2002 年よりウィリアムズ症候群の患児・患者と家族のための芸術プログラムを開催し、音楽活動を中心に、美術・ものづくり等を組み合わせた総合的な芸術活動を展開してきた。そこでは限られた時間の中で、発達段階や年齢の異なる参加者が自由に取り組めるように、「屋台」形式の活動を取り入れてきた。近年のプログラムでの造形活動を中心に、屋台形式の特徴やそれによって生起される参加者同士のつながりについて考察する。

1. はじめに

ウィリアムズ症候群 (Williams Syndrome)¹⁾の患児・患者とその家族 (親・きょうだい) を対象とした芸術プログラム (ハッピーウィリムン・キャンプ) を毎年開催し、今年で 13 年目を迎えた。芸術プログラムでは音楽を中心としながらも美術的活動やものづくり (以下、造形活動)、ダンス等の身体表現活動を組み入れた総合的な芸術活動を展開してきた²⁾。本稿は、芸術プログラムにおける造形活動の形式 (「屋台」形式) に着目し、その特徴や機能を考察するものである。

3 泊 4 日 (72 時間) の限られた時間の中で、幼児から成人まで発達段階や世代の異なる人々が参加する様々な活動を組み合わせるためには、時間的に区切られた枠組みだけで活動を実施することは難しい。そのような状況からも、この芸術プログラムでは時間性や空間性を重視した活動を展開してきた。芸術プログラムにおける「場」の特性については、子ども・きょうだい・家族・学生・教員ら参加者全員によって作り上げられていく過程や、教員養成課程における学生・教

師の協働によるアートプロジェクトの構築という視点による考察などをこれまでに報告している^{3) 4)}。

当プログラムは 10 年を超える歴史のある実践であり、開催場所やプログラム内容も多岐にわたるといふ特徴がある。近年では 2012 年度に山梨県北杜市 (保護者・きょうだい含む参加者 41 名、スタッフ 9 名)、2013~2015 年度に三重大学教育学部附属特別支援学校施設 (参加者/スタッフ数: 2013 年度 28/11 名、2014 年度 23/11 名、2015 年度 22/10 名) で実施している。その間には、プログラム参加者、教員や学生を含む携わるスタッフの増減や入れ替わり、それに伴うスタイルの変化も経てきている。各年度のテーマやプログラム内容・構成、スケジュールの組み立て等は、当日までに企画された原案に基づきつつも、参加者全員で再構築しながら実施されてきた。それゆえに、ここで導入してきた「屋台」形式について、あらためてその機能や効果を考察するとともに、それが生み出す様々な「つながり」について検討したい。

* 三重大学高等教育創造開発センター

** 三重大学教育学部技術・ものづくり教育講座

*** 三重大学教育学部音楽教育講座

2. 「屋台」形式

(1) 「屋台」形式の定義

「屋台」とは本来、路上や広場などで商いをするために用いる屋根付きの小さな店、またその商法のことを指し、車型や設置型等、可動式で場所を移して展開することが可能である。「屋台」に関する研究としては、妻木⁵⁾による屋台空間とそこに関わる人のふるまいという点から屋台文化を考察する試みや、教育実践における取り組みとして、「屋台(村)方式」「パビリオン方式」「ポスター方式」等の名称で、理科実験授業における主体的学習への取り組みや、調べ学習の成果・作品の相互鑑賞に対する効果などが報告されている(鈴木⁶⁾、栢野ら⁷⁾)。また、学習支援の方策としてこの屋台方式をとっている実践例では、「注意の集中が長く持続しない」「苦手な学習で行き詰まったり、作業に飽きて、自分で適度な休止を図ることができず、限界まで続け、結局机に突っ伏してしまう」ような児童に対し、短時間集中型で様々な教科ブース(屋台)を回って異なる学習に取り組むことや、好きなこと・嫌いなこといずれであっても適度に切り上げる経験を積むことなどが意図されている(桑原ら⁸⁾)。これらの実践例に共通する特徴としては、同時に複数のブースが併存する状態で、当事者の主体性によって自由に出店や展示を回って実験や作品を体験・鑑賞したり学習に取り組んだりすることができる点にある。

このように、「屋台」というかたちにおいてはいずれもその空間的特質に目が向けられているが、今回対象としている芸術プログラムでは、造形活動と造形活動以外の異種の活動との関連や関係が重要な意味を持っている。実験内容や作品ごとに分かれるブースが複数同時に存在しているのではなく、タイムスケジュールに沿って進行されている様々な活動、つまり、起床、朝の体操、食事や入浴といった生活行動も含め、音楽

演奏やダンス練習、屋外での散策やレクリエーション等の種々の活動の間に常に造形活動が存在していることから、1ブースであっても「屋台」的性格を持ったものとして機能していると考えられる。その様々な活動の〈開始と終了〉の連続によるプログラム全体が進行する中で、ほぼ始終開かれている常設ブースとして位置づいているゆえ、空間的特質に加え時間的特質にも着目する必要がある。したがって本研究では、複数の異なる活動が並行して展開される芸術プログラムにおける一つの活動のかたちとしての屋台形式を、次のように定義する。

「活動時間・空間の明確な境界が設定されず、他の活動に隣接する場所を確保し、つねに参加者の目に触れ、自由な時間に参加・休止可能となるような活動形式」

近年行った造形活動の一覧を表1に示す。造形活動に関わる近年の流れを概観し、そこに見られる造形活動形式の特徴について触れる。

(2) 芸術プログラムにおける造形活動の位置づけ

芸術プログラム創設当初は幼児の参加者が多かったが、今や中等教育段階から青年期を迎えている。さらに本プログラムでは家族やスタッフもともに制作を行うことが多いため、幅広い世代への対応、各自の興味関心の広がりや変化、対象者の発達段階や参加者同士の関係性、過去のプログラムにおける活動内容などを考慮した題材の設定が必要となる。それらが適う活動を準備することは、結果的に学校教育における目的や目標を内包しつつも生涯学習としての側面も備えた、社会生活体験の提供ともなりうると予想される。そのことを次に、学習指導要領に示される表現活動の本来の意味の解釈を通して述べたい。

例えば中学校美術学習指導要領⁹⁾の目標では、「表

表1 近年の造形活動一覧

実施年度	制作物	活動内容	活動形式
2012	ライヤー	木材と弦による弦楽器制作・着彩〔写真1〕	一斉形式
	絵本	スタンプ、描画	一斉形式
	布バッグ	スタンプ、描画	屋台形式
2013	星形多面体	平面構成および立体工作	屋台形式
	花カード	可変式花型カードへのメッセージ作成	屋台形式
2014	New「かぐや」	竹とアルミニウム板による鍵盤打楽器制作	一斉形式
	たすき	「にじみ」「ほかし」による布の着彩	一斉形式(交代制)
	舞台衣装	『アナと雪の女王』の衣装制作	一斉形式
2015	レインスティック	竹と爪楊枝・ストローによる楽器制作	一斉形式
	灯籠	和紙の張り子とLEDライトによるランプ制作	一斉および屋台形式
	法被	法被へのスタンプングやアイロンプリントによるデザイン	屋台形式

現および鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てること」とともに、「感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め豊かな情操を養う」ことが目指されている。またそれらを基盤とした高校美術学習指導要領¹⁰⁾では「美術の幅広い創造活動を通して、美的体験を豊かにし、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし、美術文化についての理解を深める」ことが目標とされている。この内容を踏まえると、様々な表現・鑑賞活動を通じて美術活動に楽しく取り組む姿勢や関心を持つことができ、それらを生涯にわたって育てるような心情を育てること、また、身の回りの環境やものを美的に感じとったり、それら美的要素に働きかけようとする情操を養うことが求められていることがわかる。そこでは<感受-創出>の愉しみや喜び、さらにその過程で他者の表現に目を向け、それらから影響を受けて自身の表現をつくることも意図されているだろう。しかし現実には、時間や空間の制限により、本来期待されているような創造活動や美的体験が阻まれる可能性もある。これまで幼稚園、小・中学校の造形活動や図画工作・美術の授業を観察研究する中で、子どもたちの個別の文脈や個々に異なる活動のペース、多様な関与の仕方が何らかの形で許容されていることが、表現行為や活動の質を保証するような場面を多く目にしてきた¹¹⁾。その子独特のやり方や周りのもの・ひととのつながり方で活動を展開する姿、時が経つのも忘れて没頭する様子、あるいは一つの素材とじっくり向き合うことに時間を費やすなど、それらの「過ごし方」があるからこそ醸成される表現がある。ところが、決められた時間内に共通の課題に取り組むという枠組みの中では、そのような「過ごし方」はいずれも「逸脱」や「問題」と捉えられてしまう可能性も少なくない。本来は、ものへのこだわりや無理のない個々の自然なペース、ものやひととのふれあいの中で自ずと立ち上ってくる表現意欲やかたちの顕れを大事にしてこそ、人間にとっての表現の意味と向き合うことも含めた実技系科目の目的が達成できるであろう。

同様のことは保育者養成課程を有する短期大学での造形関連科目の授業においても確認できた。将来子どもたちの表現活動を支え導く存在を目指す学生たち自身が、技術偏重主義の教育や固定的な表現観の下での窮屈さから表現やものづくり自体に苦手意識を持ち、意欲や自由な発想などは程遠い状況にいたのである。一人ひとりの表現の可能性を引き出す鍵の大きな一つは、題材そのものはもちろんのこと、造形行為・表現を包み支える環境であることが示唆された¹²⁾。そのよ

うな背景から考えても、多様な活動展開を許容する「屋台」という形式の持つ可能性は大きい。

次章では、芸術プログラムにおける3つの事例を取り上げ、「屋台」という形式が実際にどのように作用していたと考えられるかについて、活動の様子から考察する。



写真1 屋外で絵本作成、楽器への着色

3. 実践例の紹介と考察

ここでは、表1に挙げた活動の中から(1)星形多面体(2)法被づくり(3)布バッグ制作の3つを取り上げる。

(1) 星形多面体¹³⁾

<題材について>

2013年のプログラムでは、参加者たちが彼らの成果発表の場である「音楽の森Ⅲ」(2013年8月に三重大学にて開催)の舞台において、演者だけでなく、また単なる観客としてでもなく、演奏家とともに舞台を演出することとなった。具体的には、歌曲『見上げてごらん夜の星を』の舞台装飾を、プログラムの参加者全員で制作し、演奏者とのつながりを生み出すという意図が込められていた。作り手の思い入れや愛着が込められたものになることを期待して導入したが、星形多面体である。大きな舞台上でもはっきりと輪郭を捉えることができ、かつ目立ちすぎずに歌や照明に馴染むことのできる、色画用紙を用いたクラフト制作を起用した。プログラムの全体構成から、長時間を費やさずとも誰もが比較的容易に複雑な立体を制作できるような設計を試み、そこに各自の色やこだわりを反映できるようにスタンピング(スポンジや刷毛による描画)を組み合わせた「星」の題材とした〔写真2〕。準備物と制作手順は表2の通りである。

<活動形式について>

当初は、前半の描画活動からクラフト制作までのすべてにおいて、一人が一つの「星」に継続して携わり、

表2 星形多面体の活動内容

準備物	スタンプ（円形のスポンジに木の柄がついたもの）、化粧用スポンジ、刷毛、アクリル絵の具、新聞紙、紙パレット、筆洗器、ボールペン、定規、両面テープ
手順	①新聞紙上に画材と用具を用意する。 ②紙パレットにとった絵の具、スタンプや刷毛を用い、星形多面体の展開図が印刷された色画用紙の裏面にスタンプングや描画を行う。（判を押す、刷毛で線描・点描など） ③新聞紙の上で乾燥させる。 ④展開図印刷面の波線部分を定規とボールペンで留め、折り目をつける。 ⑤輪郭に沿って展開図を切り抜く。 ⑥接続代に両面テープを貼る。 ⑦波線で折り曲げ、正多角錐を組み立てる。 ⑧それぞれの多角錐のペア同士を接続する。

自分だけの固有の「星」を制作・完成させる中で個々の思い入れや愛着を持つものにしたというねらいがあったが、実際には複数の人が関わり合う中でかたちづくられた協同の「星」となった。先述したように、本プログラムは音楽活動を中心としつつ、複数の活動が並行して進められている。この題材の活動場所・形態も、一角に「ものづくりコーナー」を常設し、設定されている様々な活動の合間に参加者が訪れて制作に従事したり他の活動に移っていったりする、自由度の高いものとして設定した。そのため、描画活動の最初から途切れながらも続いているという活動となり、ある子どもの作りかけの星のパーツを他の子どもや家族が用いて制作する、というような場面が度々生じた。その結果、本人や仲間、きょうだいや親の「星」への相互の関わり方があったことにより、参加者一人ひとりの星ではなく、つながりや関わりの中で生まれた「一つだけの星」というかたちになった。

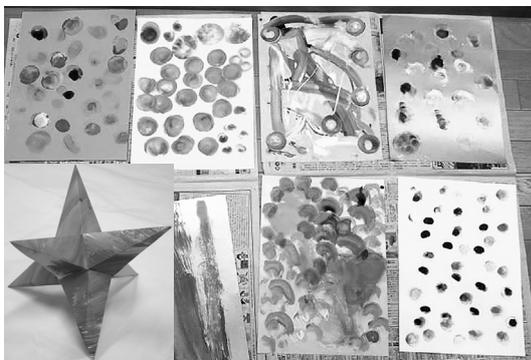


写真2 星形多面体、立体制作前のスタンプング

(2) 法被づくり

<題材について>

2015年の子どもたちの舞台発表の一つに歌舞伎が考案された。考案者の音楽科大学院生により、見得な

どの歌舞伎特有の所作や動きを取り入れたダンスの披露が最終の舞台発表目のひとつとなった。造形活動ではそこで纏う法被制作を行った。

過去の数回のプログラムにおいて、プログラムのトレードマークの一つとして、年度により色やデザインの異なる共通Tシャツを作成している。プログラムを象徴するロゴ・デザインとキャラクターの図柄が入ったデザインが基本となっているが、今回の家族に一枚の法被制作においても、参加者たちに思い入れの深いそのロゴとキャラクターデザインをメインとし、それに好きな装飾を加えるようにした〔表3〕。

絵の具とスポンジを用いたスタンプングの他に、ロゴと同じくアイロンプリントによる装飾も取り入れた。ロゴを切り抜いたあとの不規則な形状のプリント紙片を色別にトレイに分けて常設しておき、その中から気に入った形をみつけて自由に配置し、プリントできるようにした〔写真3〕。

表3 法被づくりの活動内容

準備物	無地の法被、スタンプ（星形多面体で使用したもの）、刷毛、筆、アクリル絵の具、新聞紙、溶いた絵の具を入れるカップ、筆洗器、うさぎ型スタンプ（大・中・小）、はさみ、アイロンプリント紙、アイロン、クッキングシート
手順	<スタンプ> ①新聞紙上に画材と用具を用意する。 ②カップに溶いた絵の具を用意し、刷毛や筆でうさぎ型スタンプに色を載せる。 ③法被の背の部分中央にスタンプを押して乾燥させる。 ④柄つきスタンプや筆で装飾を加える。 <アイロンプリント> ①「ハッピーウィリムン」のロゴが印刷されたプリント紙を切り抜く。 ②法被の背中にプリント紙を置き、クッキングシートの上からアイロンを当ててロゴを写し出す。 ③プリント紙を好きな形にはさみで切り出し、法被に装飾プリントをする。



写真3 廊下の一角で開かれている「法被」屋台

<活動形式について>

プログラムにおける造形活動は、作品の完成というゴールこそ共通しているものの、それらを「どの程度」「どのように」仕上げるかについては参加者に委ねられている。そのため、参加者たちの制作スタイルは様々で、モチベーションやその高まり・低下、継続して制作に従事する時間も異なる。

細かな説明や指示を繰り返すことなく、気の向くまま、あるいは計画的に、制作活動にゆるやかに入っていく。床に散らばった色とりどりで様々な形の紙片や使うたびに混ざって新たな色が生まれていく絵の具カップ、他者の制作途中の作品などがそこここに在る「屋台」という環境が、おもむろに腰を下ろして素材にふれるという参加者の行為を引き出し、完成を公言していた子どもが他の参加者の作品を見て「もうちょっと飾り増やそうかな」「もう一つつくってもいい？」と作業を再開したり新たに制作を始めたりする姿もしばしば見られた。

アイロンプリント紙の不均等な紙片（全員共通のロゴに使用した残り。「意味のある形」もあれば不定形のものもある）を入れた容器や意図しない絵の具の色の混ざりは、活動過程で偶然発生したものである。それらもいつしか表現を促す重要な要素となり、その現状を受けてさらに紙片を増やす、絵の具の使用方法に厳密さを求めない指導へと変更するなど、実施者の応答も変化していった。環境に誘われて活動が展開されるという意味において、造形活動を構成している様々な要素—素材や道具、家族やスタッフを含めた参加者たちという〈もの・ひと〉—も活動を引き出すような触媒としての環境となり得る。ここで重要なのは、あくまでも行動の主体が参加者本人にあることである。環境は行動を引き起こすものではなく行動を可能にするものであるというアフォードンス¹⁴⁾の視点と重なる。誘発可能体は個人によって異なり、複数あり得る。それらを察知し受け取った上で、自身の意思による行為が生起していると受け止めることができよう。〈もの〉も

〈ひと〉もその環境たりえ、参加者という存在そのものやそこでの行為も、互いにその環境を担い合っているとと言える。

(3) 布バッグ制作

<題材について>

2012年には一家族に一冊の絵本作り、ライヤー（木製の弦楽器）の制作・着彩、それらを用いた音楽活動が展開された。布バッグは、その絵本と楽器を納めて持ち帰ることを前提とした、言わば今年プログラムの思い出の一つとなるものとして、長年スタッフとして本プログラムに関わっている安部剛氏により提案された。本プログラムではこのように、その夏の記憶を持ち帰ることのできる象徴的な〈もの〉が度々登場している。約30cm四方の持ち手のあるキャンバス地の袋（マチなし）に木の枝と幹があらかじめプリントされたものを用意し、星形多面体と同様の材料・用具を用いてスタンピング・描画を行う活動を行った。

<活動形式について>

一家に一枚の布バッグは、宿泊先のロビーの一角に構えた「屋台」で、各家族、特に母親を中心とした参加者により、空き時間を見つけて各々仕上げておくように指示した。写真5はその様子である。音楽活動や発表練習、食事の支度や後片付けの合間を縫って、母親たちが誰からともなくこの場所に集い、時には子どもたちも参加しながら進められた。その間、絵の具や筆を手にとり動かしながら、一年ぶりの参加者同士の様々な会話が流れる。手を止めることなく、視線は布や画材に注がれたまま、我が子の成長や日頃の様子、家族が抱える様々な重みが、重苦しくも軽やかにでもなく、淡々としたトーンでやりとりされる雰囲気があった。色の選択や水の含ませ具合等に関する独り言（「ピンクがいいなあ、そっちのピンクが」「あ、水多すぎて滲んだ」）や絵の具・スポンジの貸し借りなども交えながら、「ながら作業」が続く。

ここでひとつのコミュニティ、「キルトビー」のことが思い起こされる。アメリカ西部開拓時代にパッチワークを行って生計を立て、社会活動に参加していた女性たちのことをそう呼んだが、一枚のキルトを囲み、手を止めずに制作活動をしながら、他愛もない日常話から生き方や将来のことなど様々な話を交わし合うというものである。近況報告や情報交換をしたり、時には愚痴をこぼし合ったりといった姿が見られる活動的な場であったと言われる。キルト制作をしながらの談義という、いわゆる「ながら作業」における言語的・身体的なコミュニケーションは、手指や神経は目下の作業に没頭しているからこそ、その状況下で心の内の



写真4 出来上がった法被を飾る

吐露や自分語りが促され、面と向かっては切り出しにくい日常の悩みや境遇の重なる誰かにただ聞いてほしい事柄などを打ち明けるきっかけともなっていたのではないだろうか。キルトビーは女性たちの大事な社交場であり地域コミュニティであったとも言われている。プログラムの中に、出入り自由でメンバーの固定しない作業場所としての「屋台」があることは、一年に一度の非日常空間であるプログラムと日常をつなぐ存在にもなっていると考えられる。



写真5 屋台形式による布バッグ制作
(宿泊施設内ロビースペースにて)

4. まとめ

72時間の芸術プログラム中、つねに「屋台」を開いている。1日目、2日目とプログラムが進行し、参加者たちの心身状態やプログラムへの関与の仕方が変化していく中、「屋台」は細々と流れる底流のようなものとして、全72時間という時間、参加者同士、音楽や造形と参加者、活動や練習と本番（舞台発表）、非日常と日常など、様々なものを、ゆるやかにつなぐ存在となっているのではないだろうか。今回取り上げた各題材への取り組みからは、その「つながり」方の多様なかたちの一端が垣間見えたのではないかと考えている。造形活動ではグループを組む、年少者や未経験者への指導係を設けるなどの明示的な役割分担をするわけではなくとも、お互いの行為やその結果としての作品に影響を受けながら制作を進めていた。各自のペースによる「制作中」「一時休止」「再開」などの制作時間の隔たりやズレから、制作途中の作品や使用済みの素材・材料からの発想等〈もの〉による触発を受けたり、その制作スタイル（ペース）そのものや様子、つまり〈ひと〉や〈こと〉から影響を受けることにもなる。結果として様々な人の手によって出来上がった「一つだけの星」も、〈もの〉（素材、作品）が〈ひと〉をつないでいった一例であろう。さらには、布バッグの活動で述べたように、芸術プログラムというある

意味非日常である72時間が「屋台」という場を通して日常とつながることにもなり、ある家族の過去とまた別の家族の現在、未来が時空を超えて交叉し、つながりを持つような場が展開されていたことがうかがえる。

すでに述べてきたように、「屋台」としての造形活動は、時間・空間的にも自由度の高い活動形式であるが、一方でやるもやらぬも自身の意思や計画性、実行力によってその行方が定められるという不安定さもある。それゆえ屋台という形式は、活動への参入・関与・退出に自主性や自律性、計画性が求められるという、参加者の主体的な取り組みを暗に促す仕組みを有していると見られる。その特性が、様々な対象同士の多様な「つながり」方を、可能性として提供し支援するものとなっていることが示唆された。

引用文献

- 1) 中村みほ, 「ウィリアムズ症候群の視覚認知機能」, 『認知神経科学』, Vol.11, No.1, pp.48-53 (2010)
- 2) 根津知佳子, 「芸術プログラムの構造」, 『三重大学教育学部紀要』, 第59巻, pp.269-275 (2008)
- 3) 松本金矢・安部剛・根津知佳子・圓道衣舞・榊眸・下垣温子・大池真智子「アートプロジェクトの構築Ⅰ～アートとしての“モノ”～」, 『三重大学教育学部研究紀要』, 第57巻, pp.203-210 (2006)
- 4) 根津知佳子・安部剛・圓道衣舞・榊眸・下垣温子・松本金矢・大池真智子「アートプロジェクトの構築Ⅱ～アートとしての“場”～」, 『三重大学教育学部研究紀要』, 第57巻, pp.211-222 (2006)
- 5) 妻木宣嗣, 「人のふるまいを手がかりにした屋台文化考察」, 『東北アジア研究』, 18, pp.161-174 (2014)
- 6) 鈴木克明, 「マルチメディア教材開発の実際」, 『マルチメディア教材開発養成講座テキスト』文部科学省生涯学習局, pp.1-27 (1999)
- 7) 栢野彰秀・森健一郎, 「いろいろなエネルギーを実感をもって理解させる中学校理科実験教材の開発—『屋台方式』による実験授業を通して」, 『エネルギー環境教育研究』, 3 (2), pp.11-18 (2009)
- 8) 桑原徹也・田中存・中村通雄・江田裕介, 「現在の児童養護施設における教育的な課題と旭学園の取り組み」, 『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』, No.19, pp.1-8 (2009)
- 9) 『中学校学習指導要領』, 第2章各教科 第6節美術 第1目標, 文部科学省 (2008)
- 10) 『高等学校学習指導要領』, 第2章各学科に共通する各教科 第7節芸術 第2款 各科目 第4美術Ⅰ 1目標, 文部科学省 (2009)
- 11) 守山紗弥加, 「小学2年生の造形活動での『過ごし』にみる『豊かさ』の保ちと育ち」, 『人間文化研究科年報』第22号, pp.219-223 (2007)

- 12) 守山紗弥加, 「保育者養成課程における造形活動の意味」,
『大学教育研究—三重大学授業研究交流誌—』第22号, p
p.99-104 (2014)
- 13) 松本金矢・根津知佳子・守山紗弥加, 「星形多面体を用
いた造形題材の検討」, 『三重大学教育実践総合センター紀
要』34, pp.69-74 (2014)
- 14) 佐々木正人, 『新版アフォーダンス』講談社, (2008)

参考文献

- Pat Ferrero・Elaine Hedges・Julie Silber (小林恵, 悦子・
シガベナー共訳), 『ハーツ アンド ハンズ』, 日本ヴォー
グ社 (1990)
- 小野ふみえ, 『キルトに聞いた物語』, 暮しの手帖社
(1998)